日本語景観の地理と歴史にみる言語接触

戦前・戦後の日本語領域

井上史雄（明海大学）
innowayf@yahoo.co.jp

１．言語景観史の試み：国内外の文字景観

ことばは市場価値を持ち、日本語にも国内外に言語市場が成り立っている。日本国内の言語事情について、具体的なデータを集めると、多言語化が進んでいることが目立つ。国内外言語市場の多言語化の手がかりとして、多文字表示を具体的に見よう。

言語景観は経済言語学の分野での実証的・実践的資料と位置付けうる。ここでは、日本の言語景観(linguistic landscape)を分析する。言語景観の可視的データを使用することによって、言語使用状態を確認したい。言語景観研究の目標は、多くの実例のバリエーションを集めて、法則性を見出すことである。また言語景観形成のメカニズムと背景を、歴史的な変遷に基づいて追求する。地域的変異、時代的変異を考察する。「地理は時間を反映する」という立場から、通時的研究から理論を求める。

日本語が海外で使われるようになったのは､近年の日本の経済発展と日本人の海外旅行のおかげと説明されるが、戦前の事情も対照すると、新たな位置づけができる。多文字使用という点では似ていても、ハワイと中国では事情が違う。現代日本のハングル使用増加の背景には、韓国の経済発展と自信がある。韓流の背後にも経済発展と文化的背景の見直しがある。またハワイにおける英語使用と現代日本の看板における英語使用では、メカニズムに違いがある。表面をみるだけでなく、深層を極める必要がある。

２．日本国内の多文字指数の変遷

写真１　1955 年の札幌狸小路の商店

景観言語学研究には、日本語はアルファベット（のみ）を使う国よりも有利である。多言語表示の一部は多文字表記として表れるので、文字を観察するだけで、ある程度の見当が付く。ただし漢字で書かれたものが日本語か中国語かの判断は難しいし、日本語がアルファベットで書かれることは頻繁で、外国語がカタカナだけで書かれることもある。

写真１に 1955 年頃の札幌狸小路の 1 商店を示す（札幌狸小路 1955）。商店名と商品を日本語（漢字＝表意文字、ひらがな・カタカナ＝音節文字）と英語（アルファベット＝音素文字）で示しており、文字類型のオンパレードといえる。外国では観察しにくい現象である。

以下では、国内と国外の文字景観について、全体を見渡す形で、概観しよう。まず大まかな結果を示そう。研究手法の細かい記述はあと回しにする。

使われた文字の種類に点数を与えて、「**多文字指数**」という一つの数値で文字景観を表示する。漢字 0 点、ひらがな 1 点、カタカナ 2 点、アルファベット（ローマ字）3 点、キリル(ロシア)文字・ハングルなどの民族文字に 4 点を与え、データの総件数で割った[i]。漢字を低く見積もり、日本国内で使用のまれな文字に高い数値を与えた。数値は順序変数にあたるもので、日本の欧米化、国際化（カタカナ外来語使用、アルファベット表記使用）により数値が高まる。単純化することによって、相互比較がたやすくなる。実際のグラフ作成作業では後述の棒グラフを先に作り、個々に考察したが、ここではそれと逆に、結論を先取りする形で全体像を提示する。ただしアルファベット使用によってもカタカナ使用によっても数値が上がるなどで、見落とす現象もありうるので、後述の棒グラフデータで細かく考察すべきである。

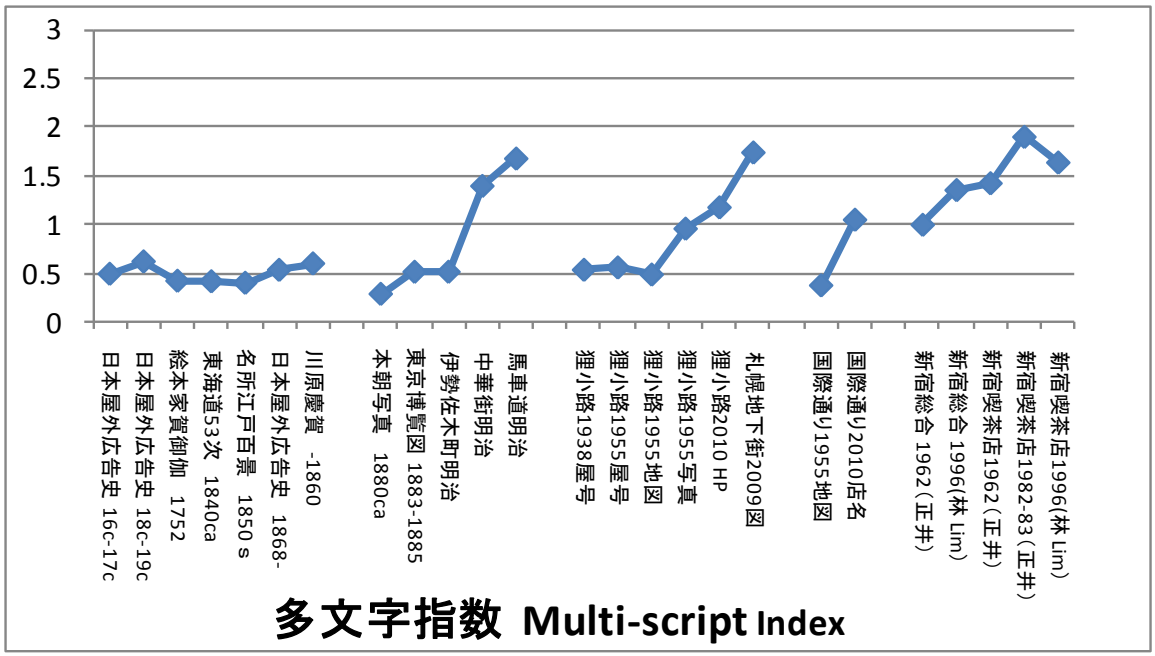

図１　日本国内の多文字指数

まず**図１**で日本国内全体の多文字指数をみる。左端の線は江戸時代以前のもので、0.5 前後である。かなが半数程度の勢力を占めるという数値である。その右の線は明治時代のデータで、やはり 0.5 前後である。ただ横浜の外国人居留地（中華街と馬車道）は外国人向けのアルファベットが多いために、1.5 前後である（現在の都市部の商店街の数値に近い）。

真ん中の線は札幌狸小路の各時期、各種の数値である。商店名簿に基づく数値は戦前も戦後も0.5前後だが、同じ1955年の店頭の写真では、カナやアルファベットが併用されていて、すでに1.5以上だった。また2010年のホームページの店名はさらにアルファベットが増えた。参考までに札幌大通地下街のデータも添える。アルファベットが多いために1.7で、東京のショッピングセンターとほぼ同じ数値である。なお他の都市の数値については、井上（2009、予定）参照。地方都市の駅前やショッピングセンターは、1.2から1.8程度で、現代は1.5が基準と考えてよい。

その右の線は沖縄国際通りの店名2回のデータである。1955年は0.5以下で、本土各地のデータよりやや低い。2010年の店名は数値が高まったが、他都市とくらべるとまだ低い。実際の店頭写真でも漢字優位、アルファベット劣位が確認できる。米軍支配への反感が背景にあると推測される。

写真２に1955年の那覇国際通りを示す（関他2006）。カタカナと漢字が見られる。他の写真でもアルファベットは少ない。ただし、他の資料写真によれば、沖縄地域の地域差が大きく、基地付近では英語だけの看板が林立していた。

写真２　1955年の那覇国際通り

図１右端は、景観言語学の先覚者正井による新宿３回の調査の総合と喫茶店のみの数値で、1から2の間に上昇した。21世紀の江（2009）の付属資料によると、新宿は1.5を越え、さらに数値が上昇している。なお喫茶店に限っての数値は、業種そのものの機能変化もあって、世の中全体の欧米化の流れを反映しない。

３．戦前日本国外の多文字指数

次に、図２で日本国外の過去と現在をみる。いわゆる植民地および移民の移住地の言語景観によって、当時の多言語状況についての情報を得る試みである。つまり海外の日本語景観を通じて、戦前の多言語状況を検証する。近代日本で領土になった順番に並べる（北海道・琉球は前述）。

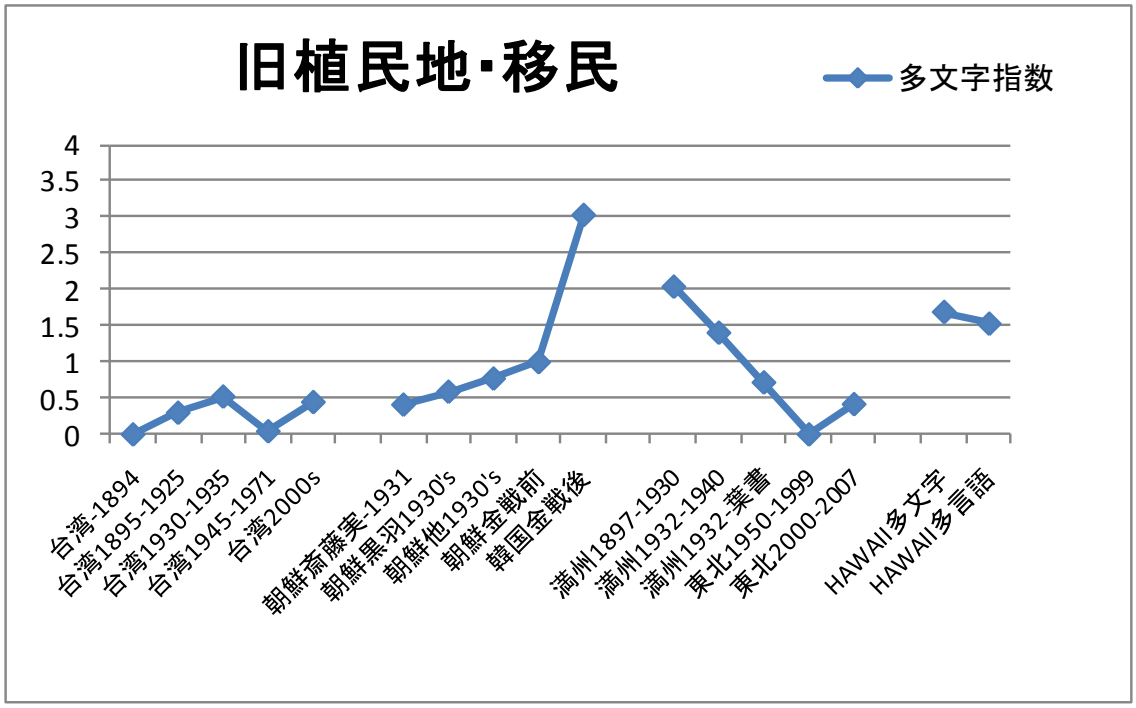

図２　旧植民地・移住地の多文字指数

図２には旧植民地・移住地の多文字指数をまとめて示す。日本統治の時代順に並べた。

まず左端の**台湾**は、1895 年以前の清朝支配では漢字だけである。1895 年以降の日本統治のうち、前半の 1925 年以前には 0.5 以下で、漢字が圧倒的だった。後半には 0.5 になり、日本字が普及したことを示す。1945 年以後の中華民国では漢字だけに変わったが、21 世紀には数値が上がった。アルファベット進出のためである。

次に 1910 年にいわゆる日韓併合を受けた**朝鮮半島**をみる。1930 年前後からの写真や絵はがきによると、多文字指数が徐々に高まっている。ハングルおよびひらがな・カタカナの使用のためである。戦後にはハングルが急速に増えた。

その右の**旧満州**の多文字指数をみる。日本進出以前に数値が高いのは、旧満鉄駅舎などのロシア（キリル）文字のためである、満州国成立（1932）後も 1.5 に近い高い数値を保つ。これもデータにロシア開発の旧満鉄関係が混じるためである。1932－1945 年の絵はがきでは、街頭の写真が多く、0.8 で、日本国内よりやや高い程度の数値である。ひらがな・カタカナが多いためもある。1949 年中華人民共和国成立後の東北地方の写真では、簡体字だけになるが、21 世紀にはアルファベットが混じる。2010 年の現地調査では、繁華街のアルファベット進出が目立った。

右端に**ハワイ**の多言語指数と多文字指数を示した。2 本の数値のうち左の多文字指数がこれまでと比較すべき数値である。1.5 を越える数値で、アルファベット表示が多いことをよく反映している。これは、現在の日本国内ショッピングセンターなどの店頭看板の数値に近い。なお多言語指数も添えたが、日本語 1 点、英語 2 点として 1.5 というのは、両方がほぼ同じ程度に使われていることを示す。同意味のバイリンガル表記もあるが、英語単独

または日本語単独の表記もあり、これらがちょうど釣り合っている状況だった。多文字指数の方が多言語指数よりも高いのは、日本字としてのカタカナが多いためである。

４．戦前移住（植民）地の言語景観と言語接触

以下では国内外の日本語景観の具体的考察を試みる。過去からの流れを追い、多様なデータをたくさん集めると、メカニズム・傾向性が浮かび上がる。戦前の日本人の言語観の偏り（「国語」押しつけ）は旧植民地でも見られた。「脱亜入欧」の思想が背景にあった。植民地で日本語を捨てるかという「言語忠誠心」language loyalty は欧亜で対照的だった。国家内の位置（日本語が公用語か）という違いもあったが、言語についての差別的な発想もうかがえる。

4.1.台湾

写真３　1930 年前後台北の商店街

日清戦争による 1895 年台湾領有後の言語状況は、他書に譲る。過去の台湾言語景観の材料として、高（2004）を用いる。1925 年と 1930 年に撮られた大量の写真と、各時期の多くの写真を含む。

写真３に戦前の台湾商店街の日本語使用を示す。ひらがな、カタカナ、漢字が使われている。

図 3 でみると、日本支配時代 50 年間のうち 1925 年と 1930 年に撮られた多数の写真で、5 年ほどの間に変化が見られた。21 世紀に同じ場所で撮った写真とも対照できる。他の地域の写真も合わせて集計した。50 年間の支配の前半より後半でカタカナが増える。またアルファベットも増えた。日本語普及の情勢を反映するのだろう。ひらがなよりもカタカナが多いのは、当時の教科書でカタカナ先習だったことも関係する。1945 年以降の中華民国時代の漢字一辺倒は、多くは別の場所の写真だが、台北一般の様子を反映すると思われる。アルファベットが混じる点が後述の旧満州の中華人民共和国と違うところである。英語の流入は旧満州と同じ程度である。

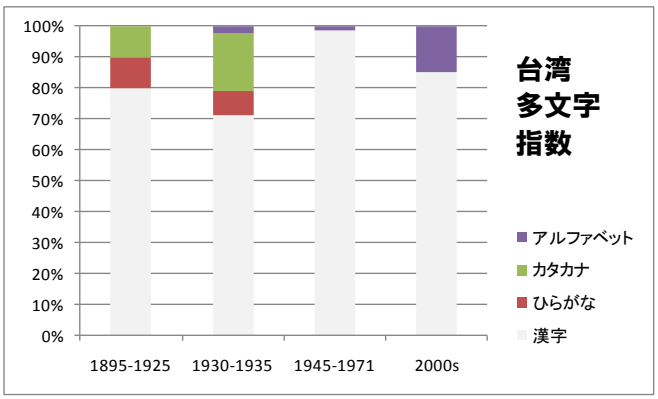

図 3　台湾の文字景観の変遷

中華民国は言語的な単一主義政策をとり、台湾語（みん南語）を禁止して、外省人の使う北京

語（普通話）を導入した。また日本語を抑圧し、原住民諸言語も大事にしなかった。これが言語景観に反映している。また親米政策は看板などの英語使用に反映している。

なお漢字は中国語を表すとは限らない（日本語・中国語のどちらを表すか決定できないこともある）ので、日本語・中国語の言語別集計はしていない。

4.2.旧朝鮮

朝鮮半島は、1910 年にいわゆる日韓併合によって、日本政府の支配を受けた。朝鮮総督府の統治のもとに様々な言語政策が実施された。当時の言語景観（文字）を示す写真・絵はがきによると、中国文化圏に属していたこともあり、漢字が圧倒的である。ハングルも使われるが、ひらがな・カタカナの増加が見られた。

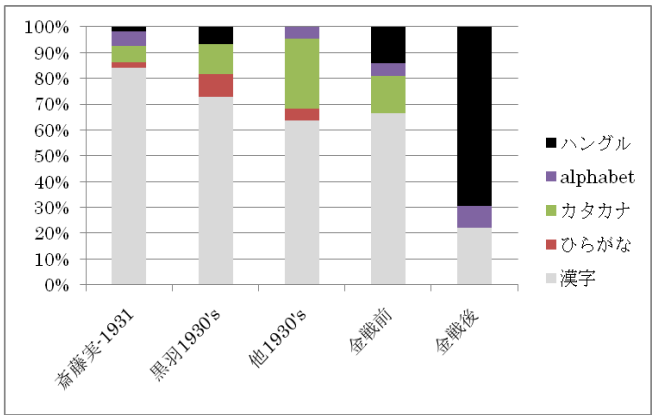

図 4　旧朝鮮の文字景観の変遷

戦後の写真ではハングルが圧倒的になった。なお 21 世紀の韓国大都市の一部では、ひらがな・カタカナが観察される。またアルファベットもよく使われる。

4.3.旧満州

中国東北部に 1932 年に成立した「満州国」は現在日本では旧満州と呼ばれ、中国では「偽満州国」と呼ばれる。建国後「五族協和」(日本人・漢人・朝鮮人・満洲人・蒙古人)が唱えられたが、言語使用から言うと空虚に響く。日本語が中国語などと接触したが、現地の日本人は中国語も、満州語（支配層が捨てた）にも無関心で、国語（日本語）の教育を行った。当時は言語を主な基準とした国民国家の思想が優勢だったという事情を考慮に入れるべきだが、多言語状況を認め、多言語話者を資源として活かすという発想は薄かったようにみえる。

写真４　旧満州の絵はがき（新京＝長春）

写真４に戦前満州の商店街絵はがきの例を示す。ひらがな、カタカナ、漢字が使われている。

この地域の言語景観の歴史を知る資料として、武（2008）と李（2005）を利用した。かつての東清鉄道・満鉄の関連建築の古写真とその後の写真の対比、および戦前の満州の絵はがきを集成復刻した本である。このデータを時代別・地域別にグラフ化した。

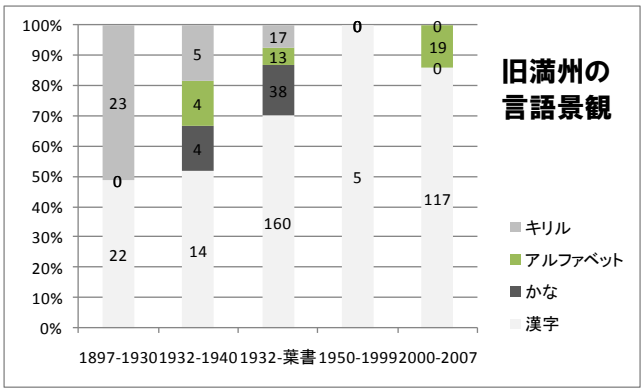

図 5　旧満州の文字景観の変遷

満鉄（満州鉄道）は、ロシア資本が清朝から権利を得て東清鉄道として建設したもので、1930 年以前には駅設備・支線にはロシア文字（キリル文字）が観察される。しかし**図 5** でみると、街は違う。写真 4 などの絵はがきでも分かるが、1932 年以降の画像ではひらがな・カタカナが増えるし、アルファベットが混じる。このように旧満州国では、文字の上からは多文字化が進んでいた。ただし、標語では「五族協和」をうたっていたが、当時の政治体制や教育をみると、多言語の状況を生かしていたとは考えられない。

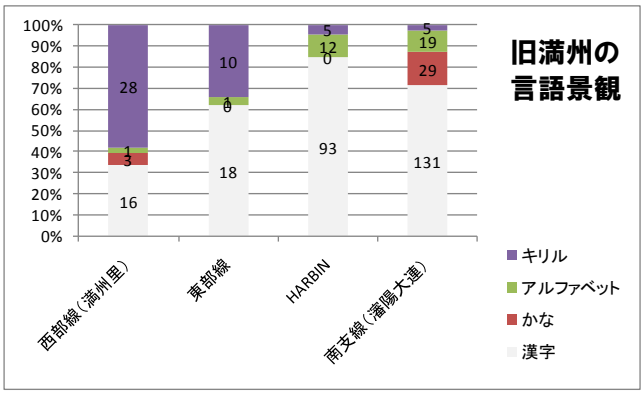

図 6　旧満州の文字景観の地域差

1949 年以降の中華人民共和国時代の写真では漢字一辺倒、簡体字であり、アルファベットが混じらない。学問ではソ連（ロシア）との交流があったが、ロシア文字なしである。中華人民共和国ではソ連と同様に国家内の多言語・多民族状況を是認する政策をとり、民族自治区を作ったりした。しかし東北３省（旧満州）の言語景観には反映されていない。

図 6 で地域別にみると大きな差がある。満鉄支線の画像にはロシア文字が多く観察されるが、満鉄関係以外の街頭の写真が少ないからである。ハルビンはロシア文字が観察されるが、街の写真も混じるので、アルファベットが多い。ここでは大連を区別しなかったが、絵はがきにしぼって地域の違いをみると大連にかなが多かった。他のデータでも同様である。日本とつなぐ港があり、日本人が多かったためと思われる。現在でも大連には日本語表示が多いという観察がある。

4.4.ハワイ日本人街の言語景観

中国との対比の点で、過去のハワイは興味深い。過去のハワイに人口の約 3 分の 1 を占める日系人がいたことは、今は人名の表示で気づくくらいである。戦前の移民排斥法をはじめとする英語への同化が背景にあった。真珠湾攻撃のあと、日本語教育が禁止され、街では日本語が実質禁止（または使用自粛）された。英語習得の経済価値は、ハワイでは際立って高かった。

戦前のハワイ日系人の言語生活、言語環境については、幸いにして膨大な資料が残されている。言語景観の資料も多種ある。あちこちの様々な時代の景観写真は、多くの本に見られるが、もっと地域・時期を限定して考察する。ここでは Okihiro (2003)によりホノルルの初期の日本人街、

Seiseido Drug Store on the corner of River and Hotel Sts. (HTPAF)

アアラ a'ala の写真集を手がかりにしよう。**写真５**に 20 世紀前半の商店の例を示す。日本語（漢字、ひらがな、カタカナ）と英語（アルファベット）が使われている。

写真５　20 世紀前半ホノルル、アアラの商店

戦前の日本人街でも、日本語表示が優勢かと思ったが、**図７**でみると、英語・日本語が張り合っている。経済要因の働きもうかがえる。日本人街においてさえ、英語の（またアルファベットの）看板が半分近くを占める[ii]。**図 8** でみると、文字としては、日本字がやや多い。ただし景観調査には、常に調査の地理的範囲のとり方の問題がつきまとう。アアラは日本人街だったから、高い数値だった。他の資料によって、ハワイ全体または他の都市や耕地 plantation をみると、日本字は少ない。それでも近代・現代の日本国内の外国人集住地での多言語使用状況とくらべると、ハワイの日本語・日本字は存在感がある。

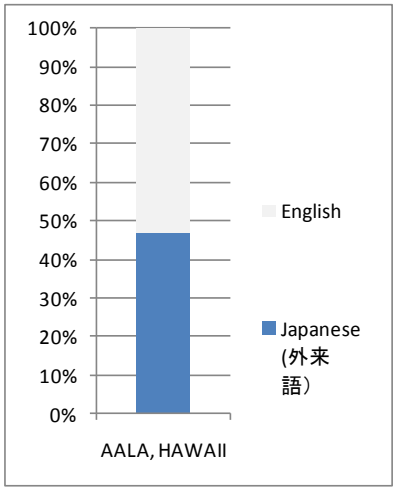

図７　ハワイの言語景観

戦前の日本国内の中国語・韓国語の表記については、ハングルが正当な表記法でなく補助的に扱われたという状況を考慮に入れても、ハワイほどに使われることはなかった。景観には市場価値という知的・経済的要因とともに、アイデンティティーという情的・心理的要因がからむのである。

ハワイの景観に表れた英語優勢は、また日英対抗と読み取るべきである。公用語としての地位を持たない日本語の文字が活躍しているからである。この背後には、ハワイ日系人 1 世の継承語努力がある。日本語学校が往々にして宗教との結びつきつつ存続した。いずれは一旗あげて、故郷に錦を飾るという経済的理由による意識があった。

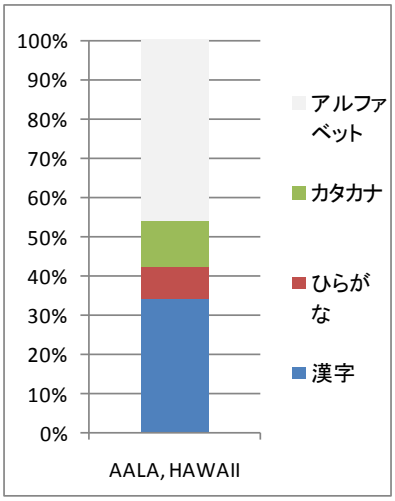

図８　ハワイの文字景観

しかしハワイ日系人 2 世は、完全なバイリンガルには育ちにくかった。その劣等感は英語ではハワイピジンであること、日本語では広島なまりであることが響いた。ハワイ日系人 3 世で

の日本語維持は例外的で、環境によるようで、また個人的努力と興味に支配される。

これに比べると、現在のハワイの日本語の商業的観光的使用も限定的である。ワイキキなどでも恒久的店名看板には使われない。観光客向けに臨時的ビラなどに使用される（または多言語の注意書きなどに登場する）のがせいぜいである。海外気分を味わいたい日本人にとって、日本字の景観は興ざめなのだろう。しかしメニューなどの実質的情報の 2 言語表記は歓迎される。

なお原住民の言語、ハワイ語は使用者が激減した。今は復活運動がある。またハワイ語と英語の 2 言語表示が、ワイキキでも、公共の表示として見られる。バス車内でも見られる。しかし意味は英語で伝わっているわけだから、世界の少数言語の運動と同じく象徴的機能しか持たない。

５．国内外の多文字指数と規制

以上をまとめると、江戸時代から明治時代にかけては、国内でも国外でも漢字が優勢で、かなは多くないし、アルファベットも居留地などを除くと表れない。つまり戦前の植民地の文字景観には均質的な部分があって、当時の国内と似ていたと言える。

一方ハワイや旧満州のように、漢字かな以外の文字を使う地域・時期は、例外的に高い数値で、国内とは違っていた。ただし、21 世紀の日本の一部はこれに近くなっている。

なお真珠湾攻撃以降のハワイ日系人は、本土の強制収容所に連れて行かれることは（指導者層を除いては）免れたが、（Speak English という標語があって）公共の場で日本語を話さず、看板の日本語も消したという報告もある。ただし、まったく規制がなかったという人もあり、実際日本語の使用についての布告などの資料は目にしていない。手記や自分史などに見られる日本語規制は自己規制、自粛だった可能性もある。またホノルルと地方の「耕地」で事情が違っていたとも考えられる。

少なくとも日米開戦以後の写真で、ハワイの日本語表示がほぼ消えたことは、乏しい写真で分かる。戦後の台湾・中国でも同様だったろう。台湾の場合は、話し言葉としては使われていても、街の看板などでは使われなくなったわけで、景観が人々の言語生活をそのまま反映するわけではないことを示す。これは現在の国内のファッション街のアルファベット表示の多さが日本国民の語学能力の高さを物語っていないのと、事情は似ている（変化方向は逆だが）。看板の文字を規制し、先駆けて変えることが可能だが、話しことばの規制は困難である。言語景観は時の理想、将来の方向を示すともとらえうる。

言語接触の有無は、文字化言語のばあいは景観に現われる。ことに定住が進んだばあいの移民では、商店名や商品名(輸入品)という広い意味の景観に、接触の状況が反映される。

景観に表れた文字には、経済要因が働く以外に、象徴としての多言語使用がある。情的機能により、時には不経済覚悟で、言語選択 language choice、文字選択 character choice が行われる。帰属意識、国民意識の表示が、移住地では意図的に行われる。国内の言語景観の調査により、外国語の使用増加については、ホスト社会の対外意識の変化が影響することが読み取れる。現代日本の多言語多文字表記が、商業的イメージで行われるのは、日本が平和な証拠である。

しかし、言語政策として制限と規制があれば、状況は別である。この関連でいうと、言語景

観に現れない言語にも注意を向けるべきである。それは、隠された、ひそかな、秘密の、否定的な、マイナスの、汚名をきせられた、スティグマとしての言語景観である。英語の使用は、過去に戦時に日本とイランによって禁止された。ペレストロイカ以前の共産主義世界では、ある種差別を受けた。現在のところ、フランス、ハンガリー、バルト 3 国、タイなどにおいて、看板の言語には規制(時には罰金)がある。またカナダケベック州ではフランス語不使用に罰金が課せられる。この場合は、一種の計画経済が働いている。ただし 20 世紀における共産主義国のまたは社会主義国の計画経済とは少し異なっているが。政治体制によって程度は異なるが、計画経済の局面は行政などの言語サービスの部門で強く表現される。言語景観は、言語事情を象徴的に示すもので、可視的指標になりうるが、景観だけを手がかりに分析するのは、危険を伴う。しかし法令や意識の記録と照合する形で研究すれば、多くの情報を提供しうる。

引用文献[iii]

井上史雄(2009)「経済言語学からみた言語景観---過去と現在---」(庄司他 2009 所収)

———(予定)『経済言語学論考』(明治書院)

Okihiro, M. (2003) *a'ala the story of a japanese community in hawaii* (Japanese Cultural Center of Hawaii)

黒羽清隆・梶村秀樹(1983)『日本の侵略:中国朝鮮』ほるぷ

江源(2009)「言語景観の成因に関する社会言語学的考察－東京と上海の比較研究を通して－」『日本研究文集 9』華東理工大学出版社

高伝棋(2004)『穿越時空看台北』(台北市政府文化局)

札幌狸小路発展史編纂委員会(1955)『札幌狸小路発展史』(札幌狸小路商店街)

庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編著(2009)『日本の言語景観』(三元社)

関行博他(2006)『沖縄アーカイブス写真集』生活情報センター

ニチマイ(2008)『朝鮮関係写真資料集 1 朝鮮絵葉書集』ニチマイ

武国慶(2008)『建築芸術長廊---中東鉄路建築尋踪---』(黒龍江人民出版社)

李重(2005)『偽"満州国"明信片研究』(吉林文史出版社)

---

i 旧満州では、場合によってカタカナ・ひらがなが(「へ」の字体判別はじめ、写真の精度により)判別不能の場合があったので、まとめて、1.5 の値をあたえた。

ii 文字で数えると日本字が多いのは、数え方のシステムによる。漢字かなまじりとアルファベットの看板が見られたときに、言語としては日本語 1 英語 1 と数えるが、文字としては漢字 1 かな 1 かな 1 と数えたためである。

iii 井上の英語論文の大部分は、以下のホームページにあり、自由にダウンロードし、印刷できる。

http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/person/inoue_fumio/